

Arthuriana Japonica: Newsletter No. 32

October 2019

国際アーサー王学会 日本支部会報
Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

目次

I. 2018年度年次大会報告	1
年次大会プログラム	1
総会議事録	2
研究発表要旨	3
講演について	4
II. 電子化について	5
III. メーリングリスト登録アドレスについて	5
IV. 会計からのお願い	5
V. 学会サイトについて	6
VI. 第33回年次大会について	6
VII. 研究発表・シンポジウム企画募集	6
VIII. 会員名簿に関するお願い	6
IX. 池上先生追悼	6
X. 文献情報	7
英文学	7
独文学	9
仏文学	9
中世ラテン語文学・その他	10

I. 2018年度年次大会報告

日本支部の2018年度年次大会は、下記の通り滞りなく開催されました。ご参加いただいた皆様ならびに開催校の不破有理先生に、厚く御礼申し上げます。

[日時] 2018年12月8日（土）13:25より

[場所] 慶應義塾大学 日吉キャンパス

（来往舎2階 中会議室）

[大会費] 1,000円（会員のみ/学生無料）

[懇親会費] 5,000円（学生3,000円）

年次大会プログラム

*開会（13:25）
*開会の辞 支部長 嶋崎 陽一（龍谷大学）
*開催校ご挨拶 不破 有理（慶應義塾大学）
*第1部：研究発表（13:30～）
司会：高名 康文（成城大学）
「アレクサンドロス大王の父は誰か：中世スペイン語版『アレクサンドロスの書』の応答」
小川 佳章（同志社大学非常勤講師）
司会：小路 邦子（慶應義塾大学非常勤講師）
「エスカリボール考：古仏語の接頭辞es-の有無について」
小沼 義雄（早稲田大学非常勤講師）
*第2部：講演（15:10～）
司会 嶋崎 陽一（龍谷大学）
「旅立ち、アーサー王の世界へ」
斎藤洋（亜細亜大学教授）
*会員研究動向・情報交換フォーラム（16:20～）
*支部総会（17:00～）
*閉会の辞（17:45～） 支部長 嶋崎 陽一（龍谷大学）
*懇親会（18:00～） 協生館2F「ファカルティラウンジ」

会員・非会員ともに多くの方にご出席いただき、2018年度年次大会も盛会のうちに終了いたしました。特に開催校である慶應義塾大学の不破有理先生をはじめ、同大学院生の李佳娟さん、中山真季さん、中川健司さんには大いにご尽力いただきました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。
(文責：小宮真樹子)

総会議事録

* 報告事項

- (1) 学会サイト「アーサー王伝説解説」について
目次を、伝説の発祥～発展を追える形のレイアウトに修正する予定であること、今後もクレティアン・ド・トロア、聖杯伝説、狐物語など、豊富なテーマで執筆を依頼中であることが報告された。
- (2) 書誌活動報告

*BIAS (Bibliography of the International Arthurian Society)*はPDF版が68号（2016年分）まで本部サイトにアップされている。69号（2017年の業績）には、日本支部から6点の業績（フランス作品5点、イタリア作品1点）が掲載予定。

日本支部ニュースレターでは、中世以外、アーサー王以外の書誌情報も幅広く扱う方針である。

(3) 電子化移行について

今年2月より、電子化へ完全移行した。郵送を希望する会員以外には、電子メールを中心とした連絡を行う。不備などあれば事務局までご報告を。

* 審議事項

- (1) 2018年度決算報告（2017年12月1日～2018年11月30日）

会計担当幹事の小川直之先生より会計収支決算が報告され、会員の承認を受けた。

収入

項目	収入額
年会費（50 件）	200,000
寄付金（0 件）	0
入会金（6 件）	36,000
特別収入(過払い金)	6,970
小計	242,970
【支部大会関連収入】	
大会参加費	30,000
懇親会費	151,000
書店出展料(1 件)	5,000
小計	186,000
2017 年度からの繰越金	863,592
普通預金口座利子	7
総計	1,292,569

支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費(未着)	0
ホームページ関連費用	6,847
事務用品代・雑費	19,966
通信費	9,840
振込手数料	0
小計	36,653
【支部大会経費】	
学生アルバイト代	10,000
懇親会費用	125,349
事務用品代・雑費	13,632
小計	148,981
2019 年度への繰越金	1,106,935
総計	1,292,569

- (2) 2019年度予算案提出（2018年12月1日～2019年11月30日）

続いて2019年度予算案が提出され、会員の承認を受けた。

収入

項目	収入額
年会費(会員数 90 名@3,000 円)	270,000
寄付金	10,000
入会金	9,000
小計	289,000
【支部大会関連収入】	
大会参加費	40,000
懇親会費	150,000
書店出展料	10,000
小計	200,000
2018 年度からの繰越金	1,106,935
普通預金口座利子	200
総計	1,596,135

支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費	200,000
ホームページ関連費用	9,000

事務用品代・雑費	25,000
通信費	50,000
振込手数料	5,000
小計	289,000
【支部大会経費】	
学生アルバイト代	0
懇親会費用	150,000
事務用品代・雑費	25,000
小計	175,000
2020 年度への繰越金	1,132,135
総計	1,596,135

(3) 新入会者承認について

以下4名の入会希望者の入会が承認された。

平彩花氏（推薦者：柏谷芳弘・小宮真樹子）
 アイヴァジャン・リリス氏（推薦者：不破有理・高橋勇）
 井上妙子氏（推薦人：柏谷芳弘・小宮真樹子）
 占部涼也氏（推薦人：不破有理・小宮真樹子）

*その他

池上忠弘先生追悼

・弟子であった小路先生より、池上先生からテキストの精読を重要視する教えを受けたこと、学会の門戸は広く開かれているべきだと仰っていた逸話などが紹介された。

（文責：小宮真樹子）

研究発表要旨

① アレクサンドロス大王の父は誰か—中世スペイン語版『アレクサンドロスの書』の応答
 小川佳章（同志社大学嘱託講師）

各国語版アレクサンドロス物語において、主人公の出生の秘密は好んで取り上げられるテーマだが、その取扱い方は各版によって様々である。たとえば偽カリステネスは「大王は元エジプト王ネクタネボが策を弄して、マケドニア王フィリッポスの妃オリュンピアスの腹に儲けた婚外子である」という風聞を事実として自らの『アレクサンドロス大王伝』に取り込んだが、シャティヨンのゴー

ティエによる中世ラテン語版 *Alexandres* や、古仏語の *Roman d' Alexandre* はこの噂に短く言及するのみで、しかもその疑惑をきっぱりと否定している。一方、*Alexandres* および *Roman* に多くを負っているとされる中世スペイン語版 *Libro de Alexandre* は、この噂の真偽について態度を保留しているようにも読める。特にアレクサンドロス王子がネクタネボを殺害する場面の「息子よ—父は言いました—神がお前を生かしてくださるように」(20d) という一節は両義性を含んでいる。つまり、実の子の手にかかったネクタネボが息子の罪を赦したという可能性と、全てを知ったフィリッポスが王家の名誉を守った息子に祝福を与えたという可能性である。前者の場合はアレクサンドロスが不義の子であることが前提とされているし、後者の場合でもフィリッポスが「父」であるのはあくまでも系譜上の問題であって、ネクタネボが実父である可能性は払拭されない。この点について Ian Michael は大王の出生の秘密が詳細に述べられないことを理由に、「スペイン語版の作者はネクタネボ父親説を信じていなかった」と結論づける。彼の見解は半世紀近く定説となっているがその根拠は薄弱である。むしろ、第 27 連や第 1063 連で大王の出生の問題が蒸し返されることからも分かるように、スペイン語版の作者はこの問題への関心が強く、しかも *Alexandres* や *Roman* と違いアレクサンドロスとネクタネボとの具体的類似性を挙げている。それは「精妙な狡知」である。以上のことから氏名不詳の作者は大王の出生の秘密を半ば事実と認めることで、自らの作品の奥行きを広げていたと考えられる。

② エスカリボール考：古仏語の接頭辞es-の有無について

小沼義雄（早稲田大学非常勤講師）
 一般的にアーサー王は名剣エスカリボールの所有者として知られている。周知のように、*Escalibor*という綴りを確認できる最古の例はクレチアン・ド・トロワの『グラアル物語』であり、ここではアーサー王ではなく王の甥ゴーヴァンが振るう名剣として

僅かに言及されているに過ぎない。クレチアン以前には、ワースの『ブリュ物語』においてアーサー王はアヴァロン島で鍛えられたCaliboreという名剣を振るっている。これはジェフリー・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』におけるCaliburnusの設定を踏襲したものだが、問題はなぜクレチアンがカリボールにes-という接頭辞をつけ、第二の主人公ゴーヴァンの愛剣として紹介しているのかという点にある。

クレチアン以降、エスカリボールをめぐる矛盾した記述はフランスの物語作者の頭を悩ませた問題であり、『ペルスヴァル第一続編』、『流布本メルラン』、『アルチュスの死』ではアーサー王からゴーヴァンにエスカリボールが与えられたという設定を追加することで所有者の帰属を合理的に説明している。その一方で、『流布本メルラン』におけるMarmiadoyse、『鸚鵡を連れた騎士』におけるChastiefolのようにエスカリボール以外の名剣をアーサー王が振るう例は幾つか存在している。他方で、ゴーヴァンは必ずしもエスカリボールの所有者と見なされていたわけではなく、頭韻詩『アーサーの死』ではGaluthという名剣を振るっており、トマス・マロリーは頭韻詩を踏襲してガウェインをGalantyneの所有者とすることで、もっぱらエクスカリバーをアーサー王の治世の象徴するレガリアとして描いているが、王の剣（石に刺さった剣や湖の貴婦人の剣）をめぐるこうした固定観念はクレチアンの時代には確立していなかった。

『グラアル物語』後半のエスカヴァロン王のエピソードは、冒頭の白鹿狩りの失敗から「血を流す槍」の探索に至る顛末まで、主人公ゴーヴァンに対する嘲笑と皮肉めいた調子に貫かれている。騎士道と宮廷風恋愛の鑑であるゴーヴァンは、かつてエスカヴァロン王を卑劣な手段で殺害した廉で告発されるが、ほかならぬエスカヴァロン王の居城で王の娘と恋仲となり、二人の情事が露見したことで激怒した市民たちから襲撃を受ける。絶体絶命のピンチの中、主人公は急場しのぎにチェスボードの盾を構え、Escaliborを引き抜いて市民たちとユーモラスな戦いを繰り広げるわけだが、この固有名詞は接頭辞es-を

付与することでCaliboreという既知の名剣をデフォルメして描こうとするクレチアンの新造語ではなかっただろうか？

本発表は、まず着脱可能な接頭辞es-のつく固有名詞が古仮語作品に若干数存在しており、Escaliborがこのカテゴリーに属する固有名詞であると説明することから出発し、次いで世界最高の騎士ゴーヴァンを滑稽に描こうとする『グラアル物語』後半の逆説的コンテクストの中で、Escaliborは主人公が陥った荒唐無稽なシチュエーションを演出する小道具として描かれていることを説明した。

講演について

「旅立ち、アーサー王の世界へ」

斎藤洋（亜細亜大学）

第32回年次大会においては、亜細亜大教授の斎藤洋先生による特別講演が行われた。斎藤先生は、ドイツ文学の研究者であると同時に、『ルドルフとイッパイアッテナ』『グリム童話』『ほらふき男爵』『西遊記』などでも知られる児童文学作家でもある。（個人的には『ギュレギュレ』シリーズも大好きである。）

今回のご講演では、現在ご執筆中の『アーサー王の世界』シリーズの創作理論を、ユーモアたっぷりに語っていただいた。興味深い執筆手法に、あつという間の60分であった。

当然ながら、研究論文と物語の執筆手法は異なる。しかしその根底には共通する部分も多い。斎藤先生は従来のプロットに「何故か？」と問いかげ、それに独自の回答を与えることで、神話や民話、シェイクスピアに『西遊記』といった物語を書き換えてきた。

そして2016年より、新たなアーサー王の物語を斬新な解釈により紡ぎだしている。今回の講演では多くの具体例を挙げつつ、『アーサー王の世界』シリーズが生まれるプロセスをお話しいただいた。

とりわけ印象的だったのは、イグレインは夫の姿に化けたユーサーを別人だと気付いていたはずだという指摘である。確かに、外見だけで親しい人間を騙せるとは考えにくい。このように、斎藤

先生は広く受け入れられていた「貞淑なるイグレイン、ユーサーの情欲の哀れな被害者」という解釈に疑問を投げかけた末、彼女を戦乱の世を逞しく生き延びる女性へとあざやかに書き換えたのだ。

さらに、斎藤先生はユーサーとアーサー親子にかけられた遺伝という呪いに着目する。イグレインといい、グイネヴィアといい、彼らは悪い女性に惹かれてしまう。そのうえで、美と悪が結びついた世界における、親子二代にわたる悲劇としてアーサー王の物語を紡いでゆく。

内容はもちろん、聴衆を巻き込む絶妙の話術を駆使した講演で、会場には何度も大きな笑いが起こった。さらには、「筋があります！」という発言に小路邦子先生が「おでんか！」というツッコミを入れたり、岡本広毅先生がグイネヴィア王妃のことを「『あんな女は最低ですね！』と言ってください」と要求されたり、オーディエンスとの一体感に満ちたトークイベントであった。

最後に、懺悔をひとつ。休憩タイムにこっそり、斎藤先生へお見せしようと応援うちわ（「ランスロット♡」「荷車☆乗って」と書いてある）を持参していたのだが、諸事情でこれを振りながら続編について質問することになったのである。斎藤先生、申し訳ございませんでした！

（小宮真樹子）

II. 電子化について

国際アーサー王学会日本支部では、会員の皆様への連絡手段に、メーリングリスト等の電子媒体を活用しております。ただし、ご希望の方へは郵送での連絡を続けております。まだご回答いただいている場合、庶務の小宮（office@arthuriana.jp）までご連絡くださいますようお願いいたします。

III. メーリングリスト登録アドレスについて

メーリングリストにおける不具合の原因となるため、「hotmail」や「aol」の参加登録を停止いたしました。

希望の方には、日本支部よりメールアドレスを新規発行いたします。事務局までご連絡ください。

IV. 会計からのお願い

2019年度分（ならびにそれ以前の未納分の）会費の納入をお願い申し上げます。会費は同封の「払込取扱票」にてお支払いいただくか、下記口座に直接お振込みください。

〈郵便振替口座番号〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部

ゆうちょ銀行口座番号：00250-6-41865

〈ゆうちょ銀行以外の金融機関からの振込み〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部

金融機関：ゆうちょ銀行（コード：9900）

店名：〇二九（ゼロニキュウ）店（店番：029）

預金種目：当座

口座番号：0041865

年会費は3,000円です。また新入会員の入会時に入会金3,000円を頂いております。新規入会希望者をご推挙いただ際には、希望者にその旨お伝えくださいますようお願いいたします。

日本支部では、一口1,000円からの寄付金を隨時募集しております。ご寄付いただけます場合、「寄付〇口」とお書き添えの上、同封の払込票をご利用のうえ年会費とともにお振込みください。皆さまの温かいご支援をお待ち申し上げます。（会計：小川直之）

【お知らせ】会費納入が5年連続して確認できなかった場合、退会扱いとさせていただきますのでご留意ください。（この手続きに関しては、2016年度第1回幹事会にて確定されました。）

V. 学会サイトについて

学会公式サイトでは、支部大会や国際大会のお知らせを掲載しております。

また、登場人物や作品を詳しく説明する「アーチ

サー王伝説解説」には、円卓、『アーサー王の死』の作者サー・トマス・マロリー、また現代におけるアーサー王として映画やゲームの項目が新たに公開されました。これからも続々登場予定です。ご期待ください。

学会公式ツイッター（@inter_arthur_jp）でも随時情報の発信を行っております。写本や映画、新刊などを幅広く紹介しておりますので、ぜひご覧ください。

学会公式サイト

<http://arthuriana.jp/index.php>

学会公式ツイッター

https://twitter.com/inter_arthur_jp

（Web委員長：不破有理）

VI. 第33回年次大会について

第33回年次大会は次の要領で開催されます。
(詳細は同封の大会資料をご覧ください。)

日時：2019年12月14日（土）12:55 開会

会場：龍谷大学 大宮学舎

懇親会会場：「京都駅前 京甚兵衛」

VII. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では随時、支部大会での研究発表・シンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご提案がございましたら庶務までお寄せください。シンポジウムは同年7月末、研究発表は同年8月末を締切とし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

VIII. 会員名簿に関するお願い

名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに庶務までお知らせください。なお会員に配布される名簿に関しては、一部の事項（所属・住所・電話／ファックス番号・メールアドレス）を未掲載にすることも可能です。ご希望がございましたら事務局までお申し出ください。

IX. 池上先生追悼

2018年（平成三十年）11月20日に急逝された成城大学名誉教授池上忠弘先生は、1932年（昭和七年）1月4日神田小川町にお生まれのチャキチャキの江戸っ子であられた。神田の小川小学校（現・御茶ノ水小学校）から早稲田中等学校に入学後、横浜第二中等学校、現在の横浜翠嵐高校二年に編入。ここで4年間の課程を修了。

1948年（昭和二十三年）慶應義塾大学予科に入学後、慶應義塾大学文学部で故厨川文夫教授（ちなみに、わたしが成城に入学した年に当時成城にいらした厨川先生がお亡くなりになり、学校葬が執り行われたのを覚えている）に師事され、大学院修士課程を修了後は助手として慶應義塾大学文学部に勤められた。その後、講師・助教授・教授と慶應での地位を歩まれた。若い頃のエピソードとしては、なんとあの世間を騒がせた巨人軍に浪人中であった某有名投手の家庭教師をしていたという。助教授時代の1970年から72年には、ケンブリッジとオックスフォードに客員研究員として留学された。オックスフォードではJ.R.R. トールキン教授にも出会われたそうである。トールキン教授の名前の発音は「トルキン」と後にアクセントがあるのだと、ご本人から伺ったそうだ。

1978年に筑波大学教授として着任され、その後1980年に成城大学法学部の教授として移って来られた。その後文芸学部の教授となられる。

実は、池上先生が成城にいらした翌年、わたしは修士に入学するも中世の指導をしてくださる先生が非常勤の方で、指導教授にはなれないとのことで他の先生に指導教授となっていただいていたのだが、その先生から中世のこういう先生がいらしたよ、と教えていただくや、「マロリーをやりたいのです！」と池上先生の研究室に押しかけて行ったのである。いきなり訳の分からぬ院生がやってきて先生も目を白黒させていらしたが、「10年やればどうにかなりますか」と問うたわたしに、とりあえずはヴィナーヴァの3巻本のテキストを読みなさいと言って下さった。その後学内でどのような経緯があったのかは知らないが、池

上先生は文芸学部に移って来られ、翌年からわたしは先生の指導を受けられることとなり、中世英文学談話会（現・中世英語英文学会東支部）などにも入れていただいた。そのため先生は、文芸学部に移れたのはわたしのお陰だと仰っていらっしゃいました。池上先生からは、中世の作品を読む際に現代の基準を当てはめてはならない、単語は一つ一つ全て辞書にあたりなさい、と教えられた。授業中に作品を読んでいるときにふと暫く黙って考え込まれることもあった。解釈について、考えていらしたのだろうか。また、あの本は読んだ方がいいですか、とお尋ねすると、読まなくても良いよ、と言われるのでそのままにしていると2、3ヶ月して「あれは読んだ？」と聞かれるので、読まなくても良いと言ったじゃないかあ～！という羽目に何度も遭ったものだ。先生の「読まなくても良い」は信じてはいけない。あるいは、15世紀の小品*Green Knight*を読んだわたしが、「駄作！」と斬つて捨てると、「いや、あれが普通のレベルで、*Sir Gawain and the Green Knight*の方が異常なのだから」と宥められたりもした。

池上先生はアーサー王文学のみならず、チャーチやラングランドなどにも造詣が深く、次々と地道な研究や翻訳、作品の校訂をされていた。中でも『農夫ピアズ』『サー・ガウェインと緑の騎士』の翻訳、*The Life of Ipomydon*の校訂テキストは代表的なものであろう。真摯に学問に取り組む姿を見せていただいた。また、国際アーサー王学会日本支部の設立にも携わられ、当支部および中世英語英文学会の会長もなされた。

ご夫妻で学会にはいらしていたが、近年は体調も今ひとつであられた。奥様の昌先生によると、亡くなる翌週から透析を始めることになっていたのだとか。そのためか元気がなかったそうである。昌先生の外出中に郵便局で倒れて病院に運ばれたので、奥様も死に目には会えなかったそうだ。昨年末に、先生にお世話をになった親しい人たちとお宅に伺って、わたしが長年やっている香道で献香させていただき、不肖の弟子であることをお詫びし、冥福をお祈りした。

(小路邦子)

X. 文献情報

ここには、当学会会員であるか否かに関わらず、国内で出版されたものを中心に西洋中世文学関連の刊行物を紹介しています。

英文学（書誌担当：岡本広毅）

＜研究（単行本）＞

岡本広毅・小宮真樹子編『いかにしてアーサー王は日本で受容されサブカルチャー界に君臨したか：変容する中世騎士道物語』みづき書林、2019年〔以下、『いかにしてアーサー王は』〕。
〔ポップカルチャーの観点からの研究をまとめた画期的な一冊〕

＜研究（雑誌・紀要論文等）＞

アラン・ルパック「イングランドとアメリカのポピュラーカルチャーにおけるアーサー王伝説」（杉山ゆき訳）、『いかにしてアーサー王は』pp.2-15, 259-78.

池上恵子「中世後期イギリス聖人伝を読む」『英米文学』（立教大学文学部英米文学専修）79、2019年、pp.31-46.

茨木正志郎「中英語における二重属格の出現と発達について」*Human Welfare: HW*（関西学院大学人間福祉学部研究会）10(1)、2018年、pp.139-48.

岡本広毅「序論—変容する中世騎士道物語」「カズオ・イシグロのアーサー王物語—ノーベル賞作家はガウェイン推し」『いかにしてアーサー王は』pp.2-15, 259-78.

岡本広毅「ファンタジーの世界とRPG—新中世主義の観点から」『立命館言語文化研究』31巻1号、2019年、pp.175-87.

貝塚泰幸「中英語騎士物語における騎士と馬との関係についての初期研究」『千葉商大紀要』56(1)、2018年、pp.53-69.

神谷昇「古英語と中英語における非人称構文の統語構造」『千葉大学教育学部研究紀要』66(2)、2018年、pp.277-83.

小谷真理「愛か忠誠か—『こころ』に見るランスロット像」『いかにしてアーサー王は』pp.66-85.

小林美樹「中英語期のVS語順：13世紀と14世紀の3作品を比較して」『神田外語大学紀要』31、2019年、pp.25-44.

- 小宮真樹子「『ドラゴンクエスト XI』における騎士道とアーサー王」『いかにしてアーサー王は』 pp.183-205.
- 小宮真樹子「『ドラゴンクエスト XI』と聖杯の探求：現代日本のアーサー王伝説」『立命館言語文化研究』31巻1号、2019年、pp.203-16.
- 齊藤雄介「中英語期における *liken*、*quemen*、*plesen* : Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English Second edition を資料として」『英文学論叢』（日本大学英文学会）67、2019年、pp.71-91.
- 塩田信之「テレビアニメーション『円卓の騎士物語 燐えろアーサー』における日本のアーサー王原像」『いかにしてアーサー王は』 pp.108-24.
- 島崎里子「古英語期における *chaste marriage* に見る女性像：Aldhelm、Bede、the Old English Martyrology and Ælfric」『女性文化研究所紀要』（昭和女子大学女性文化研究所、45、2018年、pp.1-12.
- 小路邦子「宝塚のアーサー王物語—バウ・ミュージカル『ラヌスロット』」『いかにしてアーサー王は』 pp.142-64.
- 高宮利行「「アストラット」から「アスコラット」へ—日本から発信された中世の再発見」『いかにしてアーサー王は』 pp.86-107.
- 滝口秀人「女性アーサー王受容之試論—「Fate」シリーズを中心に」『いかにしてアーサー王は』 pp.165-82.
- 宅間雅哉「古英語 *cald* に水文景観が後続するイングランドの地名」『神奈川大学言語研究』41、2019年、pp.47-62.
- 長谷川千春「ジェントルマンからサムライへ—日本武士道野球における英国騎士道—」『立命館言語文化研究』31巻1号、2019年、pp.217-26.
- 西村秀夫「In Sarsyn speche —中英語ロマンスにおける多言語の諸相—」*Philologia* (三重大学英語研究会) 50、2019年、pp.45-65.
- 藤井香子「「アングロ・サクソンの欠如」=アングロ・サクソンは人気が無い?—ローズマリー・サトクリフの歴史小説からの一考察—」『立命館言語文化研究』31巻1号、2019年、pp.227-37.
- 不破有理「The Once and Future King: 伝説と歴史と物語が紡ぐアーサー王の世界 Sir Thomas Malory、*Le Morte Darthur* の出版史から」同志社大学英文学会年次大会 特別講演 2018年10月28日.
- 不破有理「日本初のアーサー王物語—夏目漱石『薤露行』とシャロットの女」『いかにしてアーサー王は』 pp.42-65.

不破有理「読み易くすること：読者層の拡大とグローブ版『アーサー王の死』（1868）が希求した改竄」『書物學』第14巻、勉誠出版、2018年、pp.25-33.

森瀬織「一九八〇年代アキバ系サブカルチャーにおける「アーサー王物語」の受容」『いかにしてアーサー王は』 pp.125-41.

守屋靖代「“As the Book Says”—Confessio Amantis における定型表現とその変種—」『国際基督教大学学報』61、2019年、pp.23-38.

山田攻「明治・大正アーサー王浪漫—挿絵に見る騎士イメージの完成過程」『いかにしてアーサー王は』 pp.20-41.

＜原典、研究書の翻訳＞

小河舜訳「試訳 後期古英語期のウルフスタンによる説教 *Sermo Lupi ad Anglos*」『立教レヴュー』（立教大学文学部英米文学専修）48、2019年、pp.1-13.

ジャネット・ディヴィス著『ウェールズ語の歴史』（小池剛史訳）、春風社、2018年.

高田英樹訳『原典 中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会、2019年.

玉川明日美訳「試訳 中英語ロマンス *The Wedding of Sir Gawain and Dame Ragnelle*」『立教レヴュー』（立教大学文学部英米文学専修）48、2019年、pp.15-47.

バーナード・コーンウェル『小説アーサー王物語：エクスカリバーの宝剣（上・下）』新装版（木原悦子訳）、原書房、2019年.

バーナード・コーンウェル『小説アーサー王物語：エクスカリバー 最後の閃光（上・下）』新装版（木原悦子訳）、原書房、2019年.

ジャンニ・シャルル・ベルテ「サー・オルフェオ：中英語によるブルターニュの短詩」（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）、『中央評論』70(4)、2019年、pp.88-102.

J.R.R. トールキン『トールキンのアーサー王最後の物語（注釈版）』（小林朋則訳）、原書房、2019年.

＜その他＞

斎藤洋「私の『アーサー王の世界』—リライトは楽し」『いかにしてアーサー王は』 pp.2-15, 206-21.

椿侘助「コラム：沈め！アーサー王物語の沼」『いかにしてアーサー王は』 pp.16-18, 103-105, 202-204, 297-99.

山田南平／小宮真樹子「対談 永遠の王アーサーと『金色のマビノギオン』」『いかにしてアーサー

一王は日本で受容されサブカルチャー界に君臨したか』 pp.222-58.

独文学（書誌担当：田中一嘉）

＜研究（単行本）＞

河崎 靖『神学と神話：ドイツ文化誌の視座から』
現代書館、2019年。

＜研究（雑誌・研究紀要等）＞

阿部善彦「エックハルトにおける女性的なるもの」、『カトリック文化』（東京純心女子大学キリスト教文化研究センター）第11号、2018年、pp.27-55.

小川直之「『トリスタンとイズー』におけるドラゴン：女性へのイニシエーション」（第19回・第20回総合学術文化学会学術研究会の報告）、『亜細亜大学学術文化紀要』（亜細亜大学総合学術文化学会）第31号、2017年、pp.69-72.

伊藤亮平「ミンネザングにおける逆説的な身体描写」、伊藤亮平・渡邊徳明編『中世文学における身体描写の逆説的レトリックを巡って』（日本独文学会研究叢書133）、2018年、pp.5-19.

渡邊徳明 'ich bin mit lebendem libe töt. Eine paradoxe Beziehung zwischen dem Leben und dem Tod im *Tristan*'『中世文学における身体描写の逆説的レトリックを巡って』 pp.20-36.

嶋崎啓「身体描写と笑い」、『中世文学における身体描写の逆説的レトリックを巡って』 pp.37-47.

山崎明日香 'The Gnostic Pleasure Body in Wagner's Music Drama *Tristan and Isolde*'『中世文学における身体描写の逆説的レトリックを巡って』（日本独文学会研究叢書133）、2018年、pp.48-71.

寺田龍男「ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』(2)中世後期ドイツの写字生が典拠と取り組む姿勢」、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』（北海道大学大学院）第133号、2018年、pp.41-57.

寺田龍男 'Das Nibelungenlied in Japan bis 1945: eine Pseudorezeption?'『独語独文学研究年報』（北海道大学ドイツ語学・文学研究会）第44号、2018年、pp.159-172.

＜翻訳＞

クラウディア・プリンカー・フォン・デア・ハイデ著『写本の文化誌 ヨーロッパ中世の文学とメディア』（一條麻美子訳）、白水社、2017年。

[写本製作にあたり注文主が、作者が、書記が、各種職人が果たした役割や、できあがった写本がもつた政治的意味など、写本をめぐる文化活動をわかりやすく解説]

仏文学（書誌担当：横山安由美）

＜研究（雑誌・研究紀要等）＞

フィリップ・ヴァルテール『英雄の神話的諸相—ユーラシア神話試論1』（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）、中央大学出版局、2019年。

[インド=ヨーロッパ神話およびユーラシア神話の観点から見た「英雄」の神話的諸相に関する9編の論考をまとめた独創的な論文集]

フィリップ・ヴァルテール「ユーラシア神話—定義と理論上の諸問題」（渡邊浩司訳）、『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）第51号、2019年、pp. 77-85.

片山幹生「宮廷風恋愛と実証主義史学のナショナリズム：シャルル・セニヨボスの「恋愛十二世紀起源説」のコンテクスト」*Etudes françaises* 26（早稲田大学文学部フランス文学研究室）、2019年、pp.29-39、2019年。

久世順子「佐藤輝夫先生と書道への親しみ」『水脈』（徳島県立文学書道家館研究紀要）15、2019年、pp.27-32.

[佐藤輝夫の没後（1994/4）20年の企画として、「展示会」（2017/11/10-2018/1/20）および「座談会」（2017/11/18）が、出身地、徳島の県立文学書道館において開催された。「展示」は現在、永久保存の指定を受け、同館の所蔵（常設展示）となっている。「特集」は「座談会」参加の小林茂、佐佐木茂美、久世順子（登壇順）の3稿に加え、別稿、中島公子を収録している。]

小林茂「弟子でなかった者の回想」『水脈』15、2019年、pp.33-36.

佐佐木茂美「郷土・徳島を世界と結んだ学者 佐藤輝夫」『水脈』15、2019年、pp.37-47.

佐佐木茂美「澤田和夫神父様（夏の合宿）」、澤田和夫神父様白寿お祝い文集出版委員会『103人が語る澤田神父と私』教友社、2018年、pp.102-103.

[神学者、澤田神父に捧げられた一巻「ミズーリ号艦上の降伏調印立会人」（出版委員会代表・芹田希和子）]

篠田勝英「過去未来の回想」*Lilia candida* 49、2019年、pp.13-15.

瀬戸直彦「「太陽が恥じらうかのように赤く昇る」と—中世南仏の物語『フラメンカ』をめぐつて—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』64、2019年、pp.203-218.

高名康文「『新版ルナール』と『アーサー王の死』における運命の女神」『ヨーロッパ文化研究』38（成城大学大学院文学研究科）、2019年、pp.73-89.

田邊めぐみ「ブルターニュ公家の弔いのかたち—『ピエール二世の時祷書』を中心に—」『ステラ』（九州大学フランス語フランス文学研究会）37、2018年、pp.75-90.

田邊めぐみ「報告書 国際シンポジウム「中世における文化交流—対話から文化の生成へ—」」『鹿島美術研究』（鹿島美術財団）、年報35号別冊、2018年、pp.440-443.

田邊めぐみ「報告書：「メネストレル若手研究セミナー・国際シンポジウム」」*ANNUAL REPORT OF THE MURATA SCIENCE FOUNDATION* 32、2018年、pp.441-442.

田邊めぐみ・江川温「文化交流から生まれ出づるもの：『中世における文化交流』から西洋中世学の未来へ」『西洋中世研究』10、2018年、pp.256-258.

中島公子「『ローランの歌と平家物語』後編をめぐる一考察」『水脈』15、2019年、pp.49-79.

成谷麻理子「佐藤輝夫研究ノート」『水脈』14、2018年、pp.25-39.

ジャン=シャルル・ベルテ「アスゴランとスコラン—ブリトニック語圏における異界の幽靈たち」（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）『中央評論』（中央大学）70-2（通巻第304号）、2018年、pp. 81-93.

渡邊浩司「《伝記物語》の変容（その3）—ロベル・ド・ブロワ作『ボードゥー』をめぐつて」『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）51、2019年、pp. 1-32.

＜書評＞

田邊めぐみ、新刊紹介[Nicolas HATOT、Marie JACOB (eds)、*Trésors enluminés de Normandie : Une (re)découverte*、Presses Universitaire de Rennes、2016]、『西洋中世研究』10、2018年、pp.239-240.

宮下志朗「『アーサー王神話大事典』を読む」『流域』39、2018年、pp.14-19.

[16世紀専門家の宮下志朗先生による虚心坦懐なアーサー王評で一読の価値あり！]

中世ラテン文学・その他（書誌担当：横山安由美）

＜研究（雑誌・研究紀要等）＞

林邦彦「アーサー王伝説を扱ったフェロー語バッドの物語に見られるハーバート版『聖ケンティゲルン伝』の内容との類似をめぐつて」『人文研紀要』90（中央大学人文科学研究所）、2018年、pp.261-288.

＜翻訳＞

伝ネンニウス『ブリトン人の歴史 中世ラテン年代記』瀬谷幸男訳、論創社、2019年。

[アーサー王伝説の重要文献、ついに原典より本邦初訳！]

『カンブリア王メリアドクスの物語 中世ラテン騎士物語』瀬谷幸男訳、論創社、2019年。

＜その他＞

上野誠、川合康三、沓掛良彦、ワトソン・マイケル、河野貴美子「〔座談会〕古典のあり方をめぐつて」『國學院雑誌』119-2、2018、pp. 77-112.

編集・発行
国際アーサー王学会日本支部事務局

〒577-0813 大阪府 東大阪市 新上小阪228-3
EキャンパスA館 近畿大学 文芸学部
小宮真樹子 研究室内
Email: office@arthuriana.jp

メーリングリスト：members@ml.arthuriana.jp
学会ウェブサイト：<http://www.arthuriana.jp/index.php>